

「地の果てまで」 イザヤ書 52 章 7-10 節、使徒言行録 1 章 8 節

★預言者第二イザヤは、ユダヤの解放と復興を夢見て、「いかに美しいことか、山々を行き巡り、よい知らせを伝える者の足は」と歌い、「地の果てまで」神の救いがもたらされる」と預言している。しかし、その直後にあの有名な「苦難の僕の歌」(52:13-53:12)を置く。預言者自身の苦難と死によって、平和が与えられると。この苦難の僕とは主キリストにほかならず、その犠牲の死によって、平和と恵みが地に果てまでもたらされた。仙川教会も福音の使者・大串肇牧師の死を通して、さらに新しい装いを持って福音宣教に励んで欲しいと願う。

★ルカはパウロの異邦人伝道の歩みを、使徒言行録に著した。パウロはイスパニアを自らの「地の果て」と見定めたが、ローマで刑死する。ルカはその死を知りつつも、福音は必ずや彼の死を超えて「地の果てまで」達することを信じて、使徒言行録を明るく終えている。

★「地の果てまで」は仙川教会設立当初からの指針である。大串元亮先生はここ仙川の地を「地の果て」と見定めて開拓された。その後の歩みをたどると、次の「地の果て」は、当教会の伝道師であった私の奈良・高の原の開拓伝道となろう。その次は、御教会の八王子伝道。さらには、大串眞牧師による高知・宿毛伝道所の開拓、ついで千葉北総教会と、まさに地の果ては広がって行った。

★一方「地の果て」はただに地理上の問題に限らない。様々な「地の果て」が私たちの社会に存在する。例えば、ハンセン病療養所は政府の強制隔離政策によって社会の片隅に追いやられている。私が代表理事を務めている好善社は長く療養所の支援、訪問交流を続けてきた。また、私は刑務所伝道も担ってきたが、眞牧師も八街少年院の篤志面接委員をされている。これもまた社会内の「地の果て」。

★好善社は1980年代から、タイ国のハンセン病と取り組みはじめ、キリスト教団体チャントミット社を立ち上げ、側面からの支援を続けている。その流れの中で「タイ国青少年ワークキャンプ」を実施している。コロニー内の道路舗装などの労働に従事することで、日タイの相互理解、交流に取り組んでいる。

★こういう活動を通して、私自身は多くの気づきを与えられた。ひとりの療養所教会の方が「私はライ(ママ)になって良かった。キリストに出会えたから」と。私は絶句した。あの悲惨な病、酷い処遇を受けた「ライ」になって良かった?!キリストに出会うことの重さを、お前はそこまで捉えているか?十字架のキリストを目の前に突き付けられた。「地の果て」とは自らの外にではなく、私の内にある。

★今、日本の教会には勢いが無い。自らの殻の中に閉じこもってはいないか。教会の内なる「地の果て」に力を吹き込むには、やはり広く社会に目を向けること。確かに「あなたがたの上に聖霊が下ると、力を受ける」とある。あなたの「心の窓」を神に向かって開け。神の風が吹き込まれる。しかしそれだけでは風は滞る。もう一方の心の窓を社会に向かって開け。すると聖霊の風が部屋を通り抜け、あなたの心の風車が回り始め、信仰の力が沸き上がるであろう。アーメン